

## 觀念法門を通して見たる善導大師

三 長 覺 靜

### 一 序 説

觀念法門は高祖大師が觀無量壽經、觀佛三昧海經、般舟三昧經等に依つて觀佛三昧法、及び念佛三昧法の別時行儀を教へ、此れが實修によつて得る所の功德利益を示し、或は懺悔の方法を指導し、以て衆生をして出離得脱せしめんとして、ものし給へる一卷の書である。

本書之を高祖大師一代著作中に於ける地位並に著作の意趣を窺ふに、凡そ大師の御眞撰現在五部九卷何れも安心起行を必附し、假令其所明に隱顯表裏ありまはいへ、此兩者は決して相離る可らざるものゝ爲られては居るが、記主上人は據勝爲論して觀經疏一部四卷は經門、餘の四部五卷は行門に屬し、更に其行門の四部中、本書は觀念の稱名の二行を勸奨し給へるものゝ配分され、自他宗派の諸師亦其見解を一にして居る。されば此書は四帖疏の教意を末徒をして體得せしむる實踐の行儀門中特に觀稱の二行規を開示せるものなることは今更辨するの要はない。然し更に進んで之を爾餘の法事讚、往生禮讚及び般舟讚の三行門書に對比して觀るに、本書は殊に四帖疏と密接なる關係があるを謂はれる。抑大師は觀經疏に於て古今を指定して、彼の淨影、天台等の局見を是正し、觀經一部の實體を判じて「觀經は即ち觀佛三昧を以て宗と爲し、亦た念佛三昧を以て宗と爲し、一心に廻願して淨土に往生するを體と爲す」と明し、然も尙ほ教主の答説自説を細分し、一經の要旨、附屬流通の顯文を徹見して彌陀釋迦二尊の大悲懷を領し、以て觀稱の助正を高判して萬機普益の教旨を宜明せられた。されど彼疏は本來觀經の文義を辨釋するにあつて、正しく行相を教へ明さんとす

ものでなく、且つ自解説を盡す能はざるの憾がある。此に於て大師末徒を愍み給ふの餘り其隱密なるを明了に説示せんとして本書を御撰述になつたのであらう。こゝは本書を拜讀するもの、何人も感ずる所だ。信ずる。但だ今は一一彼此對照するこゝの煩を避け以下且く本書の概要を紹介するこゝとする。

## 二 解 題

本書には外題、首題及び尾題をそれ／＼題號を異にし、又中間に題號を認むるものがある。

古來通稱の觀念法門の四字題號は、是れ其外題であつて往生要集下末、選擇集所々の引文等通用する所であるが、首題には觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門一卷となつて居り、尾題には首題の名の下に經の一字を加へて十五字題號が用ひられて居る。斯く三名ありこはいへ本より具略の異りに過ぎないから、今其首題の意を述べやう。

本書の題號を一見すれば、此書は専ら觀念の念佛三昧を説き勸めらるゝやうだが、前述の如く本書は通じていはゞ念佛三昧、別しては觀佛念佛の兩三昧の方軌を教ゆるものだから、自ら題意には此二義を含むものと見なければならぬ。三祖は本書の題號を解釋して「此中に具に兩三昧の法を包たり。所謂觀と相海とは局て觀佛に在り、念の一字は局て念佛に在り。餘の十二字は兩三昧に通ず。若し爾らずんば文中の二行題に闕く答有り、題の字省略なり、再讀して題の意を顯はす可し。一には云く觀阿彌陀佛相海三昧功德法門、二には云く念阿彌陀佛三昧功德法門、又云く相海は二に通ず、念佛三昧にも亦總相歸依の念あるが故なり云々」といひ、更に「又此題中に於て教行を分別せば、前の十二字は即ち是れ其行、法門の兩字は是れ能證の教なり。功德と言ふは兩三昧の行の所生の功德なり。又法門とは法は謂く觀念即所行の法なり。門は謂く出入此二門に依て穢を出て淨に入る故に法門と名く」といふ。其意を知る可く、而して尾題に經の一字の添加せらるゝは、本書は觀經經觀正依三經を始め一部に引用する所凡そ十有二部、從て今明す所全く佛經と異

るこなきを明にし、以て當時の妨難に備へんこせられたものであらう。

又本書大段三ある中第二に觀佛念佛兩三昧の利益を明す一段に標目して「依經明五種増上緣一卷」こある、一卷の二文字或は竄入なる可きかなれど、此一段を前後の二大段に相對せしむるこ、本段の意前後に含說せられ、本段には特に之を開說せられてある丈けのものであるのみならず、此一段は獨立しても一卷の書の體裁を整へて居るから、或は單行せられたものが、後に本書中に挿入せられたものこも推斷し得られる。其何れにせよ題意を左右するものではなく、但だ今は其一卷の二字は一段こいつた意こ見做すべきである。

要するに本書の題號は能く其内容を詮するもので、本書一部の所明、端身正坐して阿彌陀佛の功德無邊にして大海の如き極妙莊嚴相を想觀する念佛三昧及び唯坐唯立して他想を以て間雜するこなく、念々見佛の想に住し、聲々相續して名號を唱ふる念佛三昧の法を教へ、而して此觀念若くは、稱名念佛成就すれば、心眼開て彼の淨境を觀見し、如來に攝取せらるゝの巨益あるこを示し、以て一切衆生の苦界を超出する要門即ち是れなるこを顯はすものである。

### 三 内 容 概 観

本書一部所明の大意は上の題意を窺つたこによつて盡きて居るが、更に今少しく本文に隨つて其内容を概觀するに凡そ此書は三大段より成り、第一に觀佛、念佛及び入道場念佛等の行相、第二に其利益たる現當二世に亘る五種増上緣第三に廣く問答して此れが信誘の損益並に懺悔の方法が明されてある。

#### 第一 正明行相 (淨全四二二七上)

此一段先づ「依觀經明觀佛三昧法一、依般舟經明念佛三昧法二、依經明入道場念佛三昧法三、依經明道場内懺悔發願法四」こ標目し、次下觀佛三昧、念佛三昧及び入道場念佛等の三行相を隨釋し、章目第四の懺悔發願法は第三章に含說

し、又第三段中の懺悔の文に譲つて別釋されて居らない。

一 觀佛三昧(二二三上七一 二二四上六一)に就ては先づ之を修せん者は須らく觀經及び觀佛三昧海經に依り、阿彌陀佛の眞金色の身、圓光徹照し端正無比なるを觀境とし、一切の時處に於て又行住坐臥を問はず、念々に専ら西方に向ひ、彼の聖衆一切の雜寶莊嚴に及ぶまで目前に對するが如く用心すべく、而して正しく之を行するには、結伽趺坐し、手掌を陸上に安き、口を合せ眼を緩く閉づる等先づ身儀を正し整へ、次に正しく心眼を以て佛身の頂上肉髻、眉毛孔光、額廣平正、眉廣長相、眉間白毫、二眼分明、鼻高直、面部平滿、耳輪垂埤、唇色赤好、齒白齊密、廣長舌、佛心相、咽項二肩、兩臂臍圓、手相平滿、佛胸萬字、腹平不現、臍圓孔深、陰馬藏、兩膝隆骨、二膝鹿主、兩足相、千輻輪相等の莊嚴功德を順觀し、又華座法、華臺、華葉、寶華莖、華莖下地等を想觀す可く、若し其觀教門に順すれば上品に往生し、又現生に於ても無量の勝徳が得られるから、或は上の如く順逆十六遍觀し、或は觀經所説の如く廣く依正通別の十三觀を凝らして淨土に回向せよ等三行相並に其利益を懇示し、後に出定の行を明して、唯だ須らく持戒念佛し、日別に十五遍乃至一萬遍小經を讀誦し、或は禮讚行等助正二行を始め一切の諸善萬行を隨宜精進勵修して、皆悉く淨土往生に回向すべしと諭へられて居る。

二 念佛三昧(二二四上七一 二二七上二一三)に就ては一卷の般舟三昧經の顯文を藉て觀經の念佛三昧を助成し給ふ。先づ其請問品即ち本經の問事品に跋陀和護菩薩が、菩薩當に何等の法を行じて智慧、自識宿命、長壽を得る哉等三二十五益を得る行法を佛に請問したるに對し、佛の答へ給へるの文を引用せらる。謂く佛十方諸佛悉在前立約行成 般舟名三昧法を行ぜば汝が所問は悉く得られるに由て、當に此定意約因行 般舟名三昧を習持して餘法に隨はざる可く、此は是れ超衆行最勝第一の功德法なりと。

次に正しく其定意の觀行法を示さんとして本經の行品を長行偈頌に亘つて長く引用せらる。其要旨に謂く「佛、跋陀

和に告げ給はく、疾く此定を得んご欲せば決定の大信を立て、見佛の一念に住し、諸想を斷じて如法精進に行す可く、即ち能想の有無、進退、前後、左右、所縁の有無、遠近、痛痒、飢渴、寒熱、苦樂、生老、病死、命壽、貧富、貴賤、色欲、小大、長短、好醜、惡善、瞋喜、坐起、行止、經法、是非、取捨、想識、斷著、空實、輕重、難易、深淺、廣狹、父母、妻子、親疎、憎愛、得失、成敗、清濁等の諸念を廢亡し一意専心歲月を忘れて精進し、睡時の外は専ら見佛の一念に住す可く、而して此れが護念助道の爲めには、衣食住を選んで簡素清淨にし、善知識に親近し、邪念諸欲を遠離し淨戒を持ち、因縁無常を觀じ、他に對しては慈哀を加へ如法教化す可きである。此くて斷想の法、護念の行を持し、見佛の念深きを致せば、便ち定意三昧を得て現前に諸佛の對立し給ふを觀奉る。行者即ち信心徹到して彌々持戒精進し獨一處止して西方阿彌陀佛の現在說法、微妙莊嚴の安樂國土を如說に念ずれば、當時當處に於て然も現身を以て上の如き妙相莊嚴を拜見し奉る。其時行者歡喜信樂して阿彌陀佛に、其國に往生すべき行法を問へば、佛即ち報へ給はく、我國に來生せんご欲せば當に我名を稱名して休息あるご勿れ、即ち往生するごを得」ご。然らば則ち行者須く常に佛身の三十二相八十種好巨億の光明徹照し、端正無比にして菩薩僧中に在て說法し給ふを如實に念ぜよ、佛の實色身を念ずるに由て正に因行定意を成就し、佛現前三昧の果德を得、殊に阿彌陀佛の直説を聽問して往生淨土の正因に於て寸毫の疑念なきに到るご。

三 入道場念佛及び看病法 (二二六上九—二二七上—三) 既に念佛三昧法の説明ありご雖も、未だ其入道場法明らかならざる故、次で此下般舟三昧經及び其他の諸經説を隨宜轉用して之を教へ、兼て看病人の法の指南がある。

先づ三昧道場に入るに就ての八則が明される。其第一は堂内の嚴儀で、行者は一に佛教の方法に據り、先づ佛堂僧房若くは在家の淨房の如き然る可き道場を選び、之を掃灑し莊嚴整備し、今は唯坐唯立法なれば一佛像を面壁に安置し奉る可く、第二行時の期限は出家は一日より八日、八日より十五日、十五日より二十三日、廿三日より三十日に至る月別

四時を期し、在家は自ら家業の輕重を量て一日乃至七日別時念佛を行すべく、第三に衣食度量を諭へて、淨衣、新淨の鞋襪を須ひ、食物は消化し易きものを用ひ儉素節量し、在家は一食長齋すべく、第四に正しく念佛する行儀は、道場中に於て晝夜心を束ねて散亂せしむることなく、專心に阿彌陀佛を念じて心ミ聲ミ相續し七日間唯坐唯立して睡眠し禮佛誦經し或は數珠を捉る等のことなく、唯だ合掌して念々に見佛の想ひに住すべく、第五に其正しく念佛する時、唯坐若くは唯立して一萬二萬の佛名を稱念し、道場内に於ては頭を交へ竊に語る可らずとて別して行儀を示し、第六に標章第四の懺悔發願法を教へて、晝夜或は三時或は六時に諸佛一切の賢聖天神地祇及び閻羅冥道に表白して、總じて無始已來別しては一生已來實に三業に造りし衆罪を懺悔し、事竟らば還て心念口稱念佛す可しミ悔過念佛を示し、第七に用心防護せしむ可く所見の境界は輒く他に説く可らず、唯事善ならば自ら知り、惡ならば深く慚悔せよと、第八に發願止作を示して、入道場中は酒肉五辛等の不淨食は誓て手にし口にせず、若し違犯するに於ては即ち身口に惡瘡を著んミ發願す可しミ教誡し、又別して行者は必ず日別の所作を兼ね可く、阿彌陀經を誦すること十萬遍、日課稱名一萬遍等力の所應に隨て修行し、誓て淨土に生れ佛に攝受せられんことを願ふ可しミ説せらる。

次に看病人の法用を明すに先づ臨終儀を明して、行者病不に抱らず臨終の時は、一に上の入道場念佛三昧法に依て身心を正し、面を西方に向け、専ら阿彌陀佛を觀想して口稱相續し、決定して往生し、華臺聖衆の來迎引接する想を作すべく、而して病人若し臨終に所想の妙境を見れば、他人隨喜の爲めに看護人に之を説けといひ、次に看病人隨待の相を辨じて、病人若し妙境現前の趣を言はゞ之を録記し、又病人語る能はざる時は必ず病人所見の境の如何を問ひ、若し病人罪相を説かば、念佛して助同懺悔し、是に由て病人の罪障消滅して華臺聖衆の來迎を見れば之を抄記して末代に留聞せよと教へ、又六親眷屬來て病人を看護する場合、酒肉五辛を食せしめず、若し食する者は必ず病人の傍に近づくることなく、以て病人の正念を失し、鬼神交亂し或は悶死せんことを警戒すべし等と懇諭させられて居る。

## 第二 正明利益

(淨全四二二七上一四一)  
(三五下一七一)

此一段は題號の功德の二字に就て廣く釋し、上來の觀佛三念佛の兩三昧の修功を辨ず可く、先づ大觀小の正依三經及び般舟三昧經、十往生經、淨土三昧經の傍依三部を標列し、謹て釋迦佛所説の此等六部往生經並に本文中所引の灌頂經、月燈三昧經、文殊般若經等に依り、主として稱名念佛する願生淨土の行者が現當二世の大功德利益を蒙ることを述べべきをいひ、次で之を廣明するに具に上の諸經を引用して滅罪、護念得長命、見佛、攝生、證生の五種増上利益の因縁を顯されるのであるが、以下少しく其大要を摘て記述しやう。

一に滅罪増上縁は觀經所説の如く下三品の人の如き一生起惡造罪して修善の功無き者も雖も、臨終に善知識に遇ひ聞名稱念すれば五十八十億多劫生死の重罪除滅し、或は又觀經に依て淨土變を畫造し、日夜に寶地寶樹寶池寶樓華座等の莊嚴、或は像相眞身觀音勢至等を觀想すれば現生に念々無量億劫生死の罪を除滅する等行者或は罪報を全く免れ、或は重報を轉じて輕微なるをいふのである。

二に護念増上縁は既に觀念殊に本願稱名の行によつて滅罪す、亦た自ら佛の隨逐加被護念を蒙り、延年轉壽長命安樂を得、諸の災障厄難及び橫病橫死禍害を免るゝことを得るをいひ、大師は具に觀經に於ける眞身觀の念佛衆生攝取不捨、普觀の常來至此行人之所、流通の觀音勢至爲其勝友の三文、十往生經の二十五菩薩影護行者、阿彌陀經の六方諸佛護念、般舟三昧經の佛の攝受及び一切諸天龍神八部衆等の隨逐影護、灌頂經第三卷の天神守護、淨土三昧經の二十五善神守護持戒人の顯文を引用し、尙ほ譬喩經惟無三昧經淨度三昧經等の意に依つて現生護念増上縁の勝益を明し、以て諸の行者に念々聲々畢命相續し専ら阿彌陀佛を稱し、或は誦經禮讚持戒等の淨業を勵んで稱念を助成す可きを懇示せられて居る。

三に見佛三昧増上縁は衆生罪懃深重にして自ら見佛し得べきではないが、佛の大誓願、三昧定、本功德の三念願力

冥に加して、専心想佛の者をして親子見佛せしめ給ふをいひ、大師は具に觀經十處の文、般舟三昧經月燈三昧經、文殊般若經等總じて四經十三文に依て證說されて居るのであるが、但だ茲に注意すべきは、此一段に引く所の顯文多くは觀念見佛を説き、從て見佛の益は觀佛三昧の行者のみの蒙むる所なるかのやうであるが、然し引用第十三の文殊般若經の文には顯はに不取相貌、專稱佛名、念無休息、即於念中、能見過現未三世諸佛、こあつて、境細心愈を恐慮する凡夫も、專佛佛名を稱ふることに依り、諸佛同體の大悲念力加被して見佛することを明す。佛の慈懷、大師の用意珍重々々深く感佩すべきである。

四に攝生増上緣とは次の證生増上緣と共に上來の三増上緣の現生の益なるに對し當生の益であつて、稱名若くは觀佛して願生する行者、命終の時、阿彌陀佛の願力に乗じて必ず往生することをいひ、大師は之を正依の三經に就き八文を以て證說され、以て此れが淨土門肝要の義なることを示された。即ち大經第十八願の文、四十八願取意の文、三輩皆專念名號の文、觀經の定散二善の行人共に授手迎接せらる、取意文、阿彌陀經の聖衆迎接の取意文、及び大經の第十九、二十、三十五願の文是である。

五に證生増上緣とは釋迦及び六方諸佛が阿彌陀佛の願力虚しからず、一切善惡の凡夫悉く前きの攝生緣を蒙ることを證說し給ふをいひ、大師は觀經散善願行緣告命評說の顯文をはじめとし、觀經勅答の取意文、第六、第七觀の必生極樂の文、大經下卷凡夫往生の文、觀經九品の衆生皆悉往生の取意文、及び小經六方諸佛證誠の文等を引用して廣く述べられて居る。

### 第三 問答廣釋 (二三六上―二二四〇尾)

此一段では三問答して信謗の損益及び懺悔の方法が明されるのである。

一 謗者の罪報上來所明の如く釋迦佛、平等の悲智に催されて五濁十惡罪業の凡夫をして極樂世界に往生することを



開示悟入せしめ給ふ、此は是れ正に頓教の文義なること歴然たるに抱らず、時人公然として信せず共に相誹毀するものあり、此の如き人の現當二世に於て受報する所如何との問を出し、改悔信佛願生の心を生ぜしむべく、答ふるに十往生經の文を引用し、正法を誹謗する者は世々に諸の惡重病を得、身根不具となり、或は聾病盲病失陰病鬼魅邪狂風冷熱痔腫失心を得る等諸苦を受けて坐臥安からず、大小便利亦通ぜず、生を求めて死を得、或は死後地獄に墮して八萬劫の間大苦惱を受け、百千萬世未だ曾て水食の名を聞かず、或は人中に生る、も牛馬猪羊となりて苦役し、偶々人身を得ても下賤にして永く自在を得ず、百千萬世三寶の名字をも見ず等こ。

二 信者の功德次に若し佛滅後の一切善惡の凡夫、發心して願生し畢命を期して日夜念佛觀佛の兩三昧をはじめ禮讚し香華を彌陀三尊に供養する者、現生に如何なる功德を得るやと問ひ、其答に六道生死の因行を閉絶し、以て永く常樂淨土の要門を開き、直に彌陀の本願に稱ふのみならず、亦諸佛普く慶喜し給ふといひ、又般舟三昧經勸發品を引いて念佛三昧の利益廣嘆の趣を示されて居る。

三 懺悔の方法 此は佛教に依て日夜六時に禮念、行道、觀想、轉誦、齋戒等精勤苦行して淨土往生を誓願するも、若し殘殃あらば亦十惡と相應せんことを恐る、如何にして此障りを除滅すべきかと問ひ、夫に答ふるに觀佛三昧海經第九第二三卷の三文を具に引き、若し所犯の罪を滅せんは、萬事を放擲して一心に教を受けて塔中に入り、佛像前に於て自撰懺悔するこゝ大山の崩る、が如く、大地に婉轉し號泣し、日夜相續せよ等と至心に懺悔し見佛滅罪する行儀を説き、又同經第十卷密行品を引て三昧の行儀を別明し、更に又大集經濟龍品に依て懺悔至誠の方法を示し後學者は佛教に依て至心に懺悔すべきを諭し、尙ほ在家の爲めに別して木槌經を引き、木槌子一百八を貰て常に自ら隨へ、行住坐臥を簡ばす至心に稱名念佛すれば煩惱障報障除滅して現前し給ふことを明して擱筆せられて居る。

#### 四 本書の經旨と高祖の風格

上來略ほ本書一卷の概要を述べたが、今更に且く本書を一貫せる所詮の義趣が那邊に存在するかを考察し、併せて以て高祖大師の風格を偲ぶこととする。

熟々觀念法門一部を大觀し、其説述の様式次第起盡及び内容の本末を案じ、大師が本書を製作せられた意趣を窺ふに本書引用する所の文廣く諸經に亘り多數に及ぶも、是れ一に觀經の宗體を顯明發揮して之を凡夫に知悉納得せしめ、兼て異見謬説を是正し其等の謗難者流を誘導せんが爲めであつたに信ぜられる。

上來縷述したる如く本書一卷其詮顯する所の要は觀佛三念佛の兩三昧にあること彼の一經の宗とする所と異りはないが、彼經は韋提の致請に因て極樂の依正二報觀を主とし表として、佛隨自意の念佛の教説は伴となり裏となつて居るので、大師は觀經疏を造つて經旨の本末を辨別し、彌陀釋迦二尊の本意を高調し、末徒をして經の文面に抱泥し、經旨を失はざるやう努められては居る。けれども諸大家すら誤解する位であるから、本經は末世愚惡の凡夫が直ちに以て信行の所依とすべく恰好のものとはいへず、四帖疏亦本經に就くものたる以上尙ほ迂遠のものたるを免れず、況んや大師の説教は凡夫をして實修實練して佛意を眞證體驗せしむるを以て第一義とせらるゝに於ては、必然淨土有緣の觀經に依り、然も其要を得旨を中心として直ちに行者に適切なる指南車たるべき述作はれ無くして止まるべきではない。此に於てか大師殊更に本書を製して、先づ彼經の觀佛三昧を明すに、敢て觀佛三昧海經の釋迦觀を藉り、以て觀經委説の觀察門中の要たる彌陀眞身觀を實修せんとする者に便せしめ、彼の依正廣略の廣觀に至つては之を本經に譲つて略示するに止められて居る。然も此事たるや單に本經末書の影略互顯又は行者實修の便不便適不適による相違のみは看過すべきでなく、次の如き説述の様子に照應して大師の意の存する所を拜察すべきものであらう。即ち本書兩三昧法の説述に於

て具略の異なるのみならず、入道場法は全く念佛三昧法に就き、又兩三昧の功德を明す五種増上緣義の下、其多くは念佛に就き、當益の二緣義は一に正依の三經の文を引用し、更に其念佛三昧法を明す最後に「欲來生者當念我名」の阿彌陀佛の自說並に此れが釋迦佛勸獎の文を掲げて、二尊の本意を明かにし、護念増上緣の下觀經眞身觀文を引用し而して特に彌陀の心光は専ら念佛の行者を照益して餘の雜業の行者を照攝せざることを教示し、見佛緣の下に於ては前に記した如く文殊般若經の「不取相貌專稱名字」の文を引證し、攝生緣の下第十八願の意を明にして「若我成佛十方衆生願生我國稱我名字下至十聲乘我願力若不生者不取正覺」を述べ給へる等、如何により多く念佛を重んじ、而して其れが稱名なることを明確ならしむ可く努められたかを窺知せしめられる。

而して本書前後に出す所の行、廣く正雜助正に亘るも、皆悉く往生淨土の爲めなることは、隨所に廻向往生淨土なる類文の見らるゝことによつて明らかである。

以上の所見之を換言すれば、大師出世當時の教界の趨勢を洞察し、自ら信奉し依憑する所の經典に偏せず、廣く衆經に依り又其間天台止觀の如きものを參酌して、道俗の趣向すべき道を示し、以て自ら自餘の諸師をして彌陀釋迦二尊の本意を知解せしめ、又劣惡の迷徒凡夫をして觀經の所説を卒直に體得せしめんが爲めに本書の製作があり、而して其觀佛三昧を教へらるゝは或は一類の別機の爲めなりといはれ、本來此書は別時行儀を主として明さるゝもの、且つ其所明の簡にして要を得たる所を以てすれば、是れ鈍根の機をして深厚なる歸依渴仰心を起さしめんが爲めであり、念佛三昧は速かに佛意に隨順せしめ心念口稱して即得往生の益を得せしめんとの慈愛心より特に其開説となり、又入道場念佛法及び懺悔法等は往生の正因正定口稱業を培養助發せしむるものとして附言せられたものであり、更に問答廣釋に至つては全く迷徒を愛護し給ふの切情の發露であつて他意ある譯ではないと窺はれるのである。

最後に本書の文勢及び今の私見を通して高祖善導大師高風の一斑を偲ぶに、大師は求道の念厚くして廣く聖教を精讀

し研覈して其精要を窮むるに、内自ら深く反省し凡情を痛感するの餘り、五體を大地に投じ悲泣雨淚して至心に懺悔し、只管如來の悲愍愛護攝取を念願し、而して此れが感應によつて體驗せられた佛陀の護念巨益に歡喜踊躍し、其洪大なる佛恩を報謝し、佛意に稱ふ可く大勇猛心を奮起し、粉骨碎身彌々自行を策勵して終に三昧を發得し、又其自得せる妙旨を廣闡流布せんが爲め、時に或は異學異見の徒と論談して此れが誘導に努め、殊に一般大衆に對し切なる同情慈愛心を以て阿彌陀如來の大慈悲光明を傳へ、隨宜に指導して心念口稱南無阿彌陀佛の易修勝行を教へ、所有心行を此に歸一せしめ、以て自他共に往生淨土の目的を達成すべく活躍精進せられ、或は著述書寫造塔等の事を以て正法の護持流傳を計り、淨土門の法益を將來の衆生に普く蒙らしめんことを、の熱情亦至烈であつたことが想見せられるのである